

〈原 著〉

## 新考『偷盗』を読む

—運命に翻弄された者達の行方と「救い」—

大友 泰司\*

The study of “Chuutou”

: The whereabouts of the people trifled with in destiny and salvation.

Taishi OHTOMO\*

### Abstract

Ryunosuke Akutagawa's work “Chuutou” was written under the influence of “Zarathustra” Nietzsche.

The work was composed as a story without contradiction by Oriental thoughts and Western ones. The first theme is salvation which is the thing of whether to be here to the person who broke the religious precepts. The second theme is to show the whereabouts of the people trifled with in destiny which originated with “Under the wheel” of Hermann Hesse. In addition to these thoughts, “The blind intention to the life” of Shopenhauer, the thought of Six way transmigration of the soul, and so on are introduced in “Chuutou”.

Then, it is decided that the women who appear in the novel die with all of the members being trifled with except for Akogi due to the idiocy of destiny.

I think that the expression “vicious body dies out.” to be the message of Ryunosuke Akutagawa so that it may be symbolized by the women who appear in this work except Akogi about this thing. Also “A body dies out though a mind is left.”

Key words: people trifled with in destiny, religious precepts, don't to do chuutou, salvation.

### はじめに

私は旧稿において、ニーチェ『ツアラツストラは斯く語りき』(以下『ツアラツストラ』と略す)影響下における『偷盗』の成立を考察した<sup>1)</sup>。さらに言えることは、龍之介は『ツアラツストラ』を下地に『偷盗』を書いた、ということである。加えて本稿では

1. 題名の由来を、仏教に説く十戒のうち、三大

罪・五大重罪の「(不)偷盗」に依る事。

2. 十戒に加えて、「六道輪廻」の考えも在ること。

3. 戒律に関係し、「懺悔滅罪」の考えも導入されていること。

4. ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』の主旨なども、『偷盗』の構図になっていること。ヘッセの他に、ショーペンハウアーの「盲目的生への意思」も織り込まれていること。

これら四つの要素が、作品を構成する横糸の思想として存在し、作品に更なる深みを与えていることを指摘出来る。

詳しくは次の通り

\* 順天堂大学スポーツ健康科学部  
School of Health and Sports Science, Juntendo University

一、『偷盗』は『ツアラツストラ』を下地にする作品と観、さらに仏教戒律に由来する作品名としてみることは、それほど唐突なことではない。ニーチェは、純粹さを好み、高貴であることを重要視した。高貴の精神にとっては、仏教の戒に反する偷盗たちの悪行と汚濁、汚辱は克服すべき悪といえるであろう。『ツアラツストラ』自体が東洋回帰を標榜し、その源流は中国・西安(唐都・長安)の景教すなわちキリスト教ネストリウス派であり、その下地に仏教が在ったことに由来する。

「偷盗」を日本国語大辞典では、仏教で十悪の一つ。盗むこと、またその人。さらに、山上憶良は「曰、一不殺生、二不偷盗、三不邪淫、四不妄語、五不飲酒、也」とあげる。

以上のことから、古来より仏の五戒、十戒の一つとして知られた言葉であった。この戒の並び順からも「不偷盗」は重大な戒であることが判る。とすれば、ただの盗みではなく、人を傷つけ偷むの意と理解しなければならない。この小説の強盗一味は殺生も平気で行う集団。

仏教説話集の『今昔物語』等に関わる平安旧仏教では、不殺生、不偷盗、不邪淫の戒を破ることを三大罪と言い、その罪を犯した者には、絶対に救いはない。また三大罪に不妄語、不飲酒を加えたものを五戒と言い、その破戒を五大重罪とし、永遠に救われることはないと言う。

救いと戒との関係は不可分である。三大罪、五大重罪を論ずることは、即ち人物の行動に言及することになるわけであるが、人物以外にも風景や動・植物にいたるまで「救い」の存在意味を持つものとして考えられている。

二、『偷盗』には、六道輪廻観も盛り込まれている。六道は、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の各道である。ちなみに、「畜生道」とは、①生前に悪行をなしたものが赴く世界で、禽獣の姿に生まれて苦しむ。②人倫上許しがたい間柄、すなわち肉親間での色情。六道輪廻は、一切の衆生がこの六つの世界に迷い込むという仏教観である。この仏教観は、インド(天竺)由来であるが、『今昔物語』

の説話に多く見られる。

『偷盗』五の最後、太郎の「どうせみんな畜生だ」のつぶやきは、迫力を持つ。

この分野に限っての先行研究として、次のものがある。

森正人(1990年).《偷盗》の構図—六道の辻の女と女夜叉—。熊本大学文学会文学部論叢. 31号

三、平安旧仏教で、三大罪・五大重罪を犯した者は、永遠に救われないことになるわけである。対して、鎌倉仏教(懺悔仏教)では、罪・科を悔い改めれば、救われるという。詳しくは、懺悔は救われ・生まれ変わりの手続きである。因みに、懺悔の読みは、仏教で「さんげ」、キリスト教で「ざんげ」。

四、ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』の主旨は、「運命に翻弄された者達」である。『偷盗』導入部の風景として示される。

「その車の輪にひかれた、小さな蛇も、(中略)もう鱗一つ動かさなくなってしまう。」は、導入部だけに物語全体の行方を象徴的に物語っている。また、ニーチェは人間の生として、盲目的に権力を目指すもの、としているが、龍之介も漱石もこの説をとらないで、「盲目的生への意思」説をとっている。[七]での必死の戦いの場で、男たちは「盲目的生への意思」によって生き、猪熊の婆や病気の女は「運命に翻弄され」死んでゆく、との考えが用いられている。

龍之介は王朝物として大正四年に『羅生門』、同五年に『芋粥』に続き、同六年に『偷盗』を、また同十年に『往生絵巻』を発表している。『偷盗』と『往生絵巻』の間には、『地獄変』『竜』などの作品が在るものの、それらは『今昔物語』関連の物語の域を出ていない。

したがって、戒と救いに力点を置く作品は『偷盗』と『往生絵巻』であり、作者の関心の深さが窺い知れよう。

『偷盗』に登場する一群の人物で、阿濃以外はなんらかスネに傷を持つ者達である。彼らに救いはあるのか、の視点を設定し作品を論ずることは、龍之介自身の作品評に惑わされることなく、作品を再評

価することにつながる、と筆者は考えている。  
作品に則して考えを進めていこうと思う。

### [一]

[一]は作品の導入部である。

作品の自己評価とは反対に、『偷盗』は会話文と絵画的表現を交えた、小説としての技巧を凝らした文章によって始められている。ここに並々ならぬ龍之介の意欲を見て取れる。作品に対する自己評価の厳しさは、意欲の裏返しとして考えられる。具体的には次のように示される。

「お婆、猪熊のお婆」

朱雀綾小路の辻で、じみな紺の水干に揉烏帽子をかけた、二十ばかりの、醜い、隻目の侍が、平骨の扇を上げて、通りかかりの老婆を呼びとめた。――

あらためて、この三行の冒頭を読み返してみると、ことば遣いといい、小説のすべてが凝縮されていると評価できる。つまり、この三行により小説の読者を一気に小説の中へと引き込んでいき、その関心は、醜い隻眼の侍と老婆たちへと移っていく。そして、お婆・侍をとりまく周囲の状況は

むし暑く夏霞のたなびいた空が、息をひそめたように、家々のうえを掩いかぶさった、七月の或日さかりである。男の足をとめた辻には、枝の疎な、ひょろ長い葉柳が一本、この頃流行る疫病にでも罹ったかと思う姿で、形ばかりの影を地の上に落しているが、此処にさえ、その日に乾いた葉を動かそうと云う風はない。

と、空と葉柳の二文によって述べられる。大きな「空」と小さな「葉を動かそうと云う風はない」と対比させることによって、読者は絵画的イメージを持って情景を想起することができる。さらにこの情景にもう一つ、ほこりっぽく乾いた情景を重ねていく。

まして、日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせいか、人通りも今は一しきりとだえて、唯さっき通った牛車の轍が長々とうねっているばかり、その車の輪にひかれ

た、小さな蛇も、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をぴくぴくやっていたが、何時か脂ぎった腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないようになってしまった。

と記される。大路の「牛車の轍が長々とうねっているばかり」と大きな風景を描き、中の「車の輪にひかれた、小さな蛇」が「その尾をぴくぴくやっていたが(中略)、鱗一つ動かさない」と小さな生き物の死を対置し、さらに「炎天の埃を浴びたこの町の辻」に対し、「僅かに一滴の湿りを点じたもの」「腥い腐れ水」と記し対比の妙を見せ、まさに一幅の絵を見るようにその場を想起することができる。この風景のうちに一越智治雄等が示すように一、埃っぽく・一点の涼味もない不快な光景のうちに物語が始まる。

先の小生の稿において考察した『ツアラツストラ』との思想的な関わりをさらに深く探ると、とき、「蛇」は「マムシの噛み傷」<sup>2)</sup>に相当し、その関連において[六]の毒蛇を食べて衆生を救う孔雀明王の存在も想起出来よう。このように外国の思想や文学にも目を向けて考えてみると、「車の輪にひかれた、小さな蛇」からは、この外に、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』が想起され、運命に翻弄され息絶え、死んでゆくもの達が同時に思い起こされ、非常に示唆的な小説の幕開け(導入部)となっている。

この引用部の後、太郎とお婆は閑談を交わしながら、取り巻きの主な人物たちに触れ、物語のすじを運ぶ最小限の情報を読者と共有しながら、その概略を話していく。物語の大筋は、お婆が「集るのは羅生門、刻限は亥の上刻一みんな昔からきまっている通りさ」と語る方へと流れていく。

ちなみに、「更けやすい夏の夜は、早くも亥の上刻に迫って来た。

という一文で始まるのは[六]の章段で、現在の時刻で午後十時～十一時ごろで、著者の手帳に「真夜中の暗がりに何かが起きる」と英文で記された構想に相当する章段である。この問題は創作意図とも深く関わっていて、プロット上の問題と併せて論ずる

ことが適切であると考えるので、今はこの問題を指摘するにとどめる。

## [二]

[二]はお婆中心の章段である。

お婆は、自分が若かった時には、都も華やかであったことを回想し、

昔は、牛車の行き交いのしげかった路も、今は徒に薊の花が、さびしく日だまりに、咲いているばかり、仆れかかった板垣の中には、無花果が青い実をつけて、人を怖れない鴉の群れは、昼も水のない池につどっている。

という現実にはわが身を置いている。つまり、髪が白み皺がよって、腰のまがるような、老いの身になっている。その中で、沙金出生の秘密を次のように語る。「台盤所の婢女をしていたころ(中略)思いがけない身分ちがいの男に、挑まれて、とうとう沙金を生んだ」と。このような時間の経過とともに、心までも荒んでしまったことを次のように語る。

始めて娘と今の夫との関係を知った時、自分は、泣いて騒いだ覚えがある。(中略)それも、当たり前のこととしか思われない。盗みをする事も、人を殺す事も、慣れれば、家業と同じである。(中略)自分の心も、もう荒んだ事を、苦しめない程、荒んでしまった。

この時点にあっては、沙金の出生秘話といい、傍線部といい、仏教の戒律・三大罪を犯し、平安旧仏教の見解からは、「救いようのない人」であったと評してよい。またストーリー上に、疫病に罹り、竹の柱に箆をかけて小屋とした中に四十ほどの女性が登場する。その有様は

四十恰好の小柄な女が、石を枕にして、横になっている。それも、肌を掩うものは、腰のあたりにかけてある、麻の汗衫一つぎりで、殆ど裸と変りがない。見ると、その胸や腹は、指で押しても、血膿にまじった、水がどろりと流れそうに、黄いろく滑に、むくんでいる。殊に、蓆の裂け目から、天日のさしこんだ所で見ると、腋の下や頸のつけ根に、丁度腐った杏のよう

な、どす黒い斑があって、そこから何とも云いようのない、異様な臭気が、洩れるらしい。と述べられる。これを見た気丈な猪熊の婆でさえも、後ずさりし「その刹那に、突然さっきの蛇の屍骸を思い浮かべた」。そして、次郎が彼女の状態を見ているそのことを問い、次郎との会話の中で、再び彼女のほうを見やると「はげしい嫌悪の感に、面を打たれるような心もちがした」と婆の心情を述べる。そして[二]の最後では、「楚の先に蛇の屍骸をひっかけた、町の子供が(中略)その蛇を女の顔の上へ抛り上げた」。すると「今まで死んだようになっていた女が、その時急に、黄いろくたるんだ睡をあけて(中略)砂まぶれの指を一つびくりとやると、声とも息ともわからないものが、干割れた唇の奥の方から、かすかに洩れて来た」と描写する。

この[二]の章段では、上記のように女の存命を示して終わるが、後の章段で、直接女にふれるところはない。しかし[六]の救いを示唆する章(後に詳しく考察することにする)の後、生存をかけての必死の戦いを描く。[七]の章段で「女の骨肉を奪い合っている、獐猛な野犬の群れ」という表現の中に、女の命の行方が示されている。

お婆の口から語られる、沙金の出生の秘密は、運命に翻弄された生であることを示している。さらに、疫病にかかった女も、沙金同様に運命に翻弄された生であったことを、子供が女の顔に蛇の屍骸を放り投げた一件は、象徴的に物語っているものと考えられる。言うまでもなく、疫病にかかった女、言わば「邪悪な肉体」の女に救いはないと断定できよう。

## [三]

[三]は太郎中心の章段である。

荒れ果てた都の昼下がり「日中の往来は、人通りも極めて少ない。(中略)両側に建て続いた家々は、いずれもしんと静まり返って、(中略)町中の人々が悉、死に絶えてしまったかとさえ疑われる。」と描かれ、破滅の方向へ進んでいく。このような雰囲気の中、沙金の魔性ぶりを太郎の「想い」の中で

述べていく。

猪熊の婆の云ったように、沙金を次郎に奪われると云う惧は、漸く目の前に迫って来た。あの女が、——現在養父にさえ、身を任かせたあの女が、痘痕のある、隻眼の、醜い己を(中略)目鼻立ちの整った、若い弟に見かえるのは、元より何の不思議もない。(中略)と云うよりも、沙金の淫な媚びのたくみを、見下げすぎた誤りだった。独り次郎ばかりではない。あの女の眼ざし一つで、身を亡ぼした男の数は、この炎天にひるがえる燕の数よりも、沢山ある。現にこう云う己でさえ、唯一度、あの女を見たばかりで、とうとう今のように、身を墮した。……

「女の眼ざし」には、恐ろしい力があって意志を麻痺させようとする([四]・次郎との拘りに於いて)、とも述べられる。

身を墮とす前の太郎は、三宝を敬い、王法に遵うことも怠らなかった、いわば模範的・善良な市民であった。しかし、「今では、盗みもする。時によっては、火つけもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。(中略)昔の己は、今の己の眼から見ると、どの位仕合せだったかわからない。」と述懐する。この時点においては、平安旧仏教の戒律の観点からは、重大罪ゆえに「救い」はないことが予想される。が、もの想いの中にある太郎には、「車の金具の、まばゆく日に光ったのが、僅に眼にはいっただけである。」と述べられ、大きく「ツアラツストラ」の救いを示唆する「光」からは、太郎の破滅的死がないことが暗示されている。

また、太郎は想いの中で、「あの女と養父との関係は、それ(他の男女関係)とちがう」特別なものと感じている。

己は、偶然あの女と養父との関係に、気がついた。尤も己一人が、沙金を自由にする男でない云う事も、知っていなかった訳ではない。沙金自身さえ、関係した公卿の名や法師の名を、何度も自慢らしく己に話した事がある。が、己はこう思った。あの女の肌は、大ぜいの男を知っているかも知れない。けれども、あの女の心

は、己だけが占有している。そうだ、女の操は、体にはない。——己は、こうと信じて、己の嫉妬を抑えていた。(中略)兎も角もそう思うと、己の苦しい心は幾分か楽になった。しかし、あの女と養父との関係は、それとちがう。

己は、それを感じた時に、何とも云えず、不快だった。

そして太郎は「そう云う事をする親子なら、殺して飽きたらいい。それを黙って見る実の母の、猪熊の婆も亦、畜生より、無残な奴だ」と考えている。

これを記す龍之介の脳裏には、もし太郎がこの事を実行したならば、地獄絵が広がることになる想定していたことであろう。しかし、この時点では「何度太刀へ手をかけたか、わからない」と表すに留めている。つまり、仏教に言う畜生道に墮ちた者達・「獣みち」の真っただ中にいる親子を強調している。このことについては[五]に於いて、爺と(阿濃と)太郎との間で罵倒しあいが行われ、ストーリーの上で改めて「畜生」の意味を捉えなおしている。

また、太郎は盗人の疑いで牢に入れられた次郎を助け出すため沙金と共に、牢破りを行うがその時、はじめて人を斬り殺してしまう。それ以来「弟と一しょに盗人の仲間入りをした。それからの己は、火もつける。人も殺す。悪事と云う悪事で、何一つしなかったものはない。(中略)己は何時の間にか、悪事を働くのが、人間の自然かもしれないと思いついた。……」そしてさらに、「己は、悪事をつむに従って、益沙金に愛着を感じて来た。人を殺すのも、盗みをするのも、みんなあの女故である。(中略)。そう思うと、猶更己は、何に換えても、あの女を失いたくない」と語る。

次に続く文章も、太郎の生の把握そのものと考えることができる。

沙金によって悪の世界に導かれ、何に換えてもあの女を失いたくないと思わせられた太郎であるが、次郎と沙金とのかかわりについても、ある特別な想いで観ていく。

こう思えば、次郎と沙金とが、近づくようにな

るのは、無理もない。が、無理がないだけ、それだけ、己には苦痛である。弟は、沙金を己から奪おうとする。(中略)己の失うのは、独り沙金ばかりではない。弟も一しょに失うのだ。そうして、その代わりに、次郎という名の敵が出来る。(中略)。そうなれば、落ち着く所は、今から予めわかっている。弟を殺すか、己が殺されるか。……

太郎は、死人の臭いが、鋭く鼻を打ったのに、驚いた。が、彼の心の中の死が、臭ったと云う訳ではない。

(後に「腐爛した子供の死骸が二つ、…捨ててある」の文がつづく。「心の中の死」を否定はするものの、筆者は、龍之介の心象風景を反映しているものと考えている。)

太郎にとって、沙金を失うことは弟も失い、自らの命も失うことになるかもしれないと感じている。「心の中の死」は、死の意識または死の自覚と考えてよいが、本文では否定しているだけに、読者はその分余計にそう感じてしまう。そしてこの段落の締めくくりに「太郎は、目のあたりに、自分の行く末を見せつけられたような心もちがした」と結ぶ。

これらの記述は、龍之介の生の把握と主人公太郎のそれと、同一的に考えることができよう。(この項、拙稿3)。よりの再述)

太郎の「生」の苦痛は、「醜い魂と美しい肉身をもった人間」沙金と共にある。沙金が太郎の肉親、弟次郎に奪われようとするとき、太郎は「己の二十年の生涯は、沙金のあの眼の中に宿っている。だから沙金を失うのは、今までの己を失うのと、変りはない。沙金を失い、弟を失い、そうしてそれと共に己自身も失ってしまう。己はすべてを失う時が来たのかもしれない。……」と思い、目に涙を浮かべるのである。

太郎のこの思いは、『ツアラツストラ』第三部、「後の舞踏の歌 1」<sup>4)</sup>。に対応している。その概要は、「生を通常の意味で追求すれば逃げて行く、認識の果てに生と認識者との悲しい相愛。そして苦や死を包摂しての生の永遠讃歌がひびく」—手塚富雄

訳『ツアラツストラ』一である。試みに「後の舞踏の歌 1」(362)の冒頭部を参照してみる。

さきごろわたしはおまえの目に見入った。お、お、生よ。お前の目の夜の中に、わたしは黄金がきらめくのを見た、—私の胸はそれを見るよろこびに鼓動をとめた。

偷盗の首領・沙金の名は、ここに由来するのかもしれない。沙金の眼の表現に関して、龍之介は『ツアラツストラ』に対して忠実な対応をしていることが判る。

#### [四]

[四]は次郎が中心となって展開される章段である。次郎について、太郎は告白の中で

己と弟とは、気だてが変わっているようで、実は見かけ程、変わっていない。(中略)醜い、隻眼の己が、今まで沙金の心を捕えていたとすれば、それは己の魂の力に相違ない。そうして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、己に変わって持っている。

と語り、「同魂」、「同魂の力」を持つ兄弟であることを強調する。

次郎も太郎同様に苦しんでいる。「何で自分は、こう苦しまなければ、ならないのであろう」と。その原因は「沙金に恋をしている。が、同時に憎んでもいる」—ここでも同『ツアラツストラ』第三部、「後の舞踏の歌」(p363/364)に対応している:「わたしは近づくおまえを恐れ、遠ざかるおまえを愛する。(中略)わたしはこれまでもおまえのために、ありとあらゆるせつなさを悩んできたではないか。」—ことによる。そして次郎は、心の中で「あの女に会う度に、始終兄にすまないと思っている。(中略)そうして、沙金に会うと、—今度は自分が、折角の決心を忘れてしまう。が、その度に、自分はどの位、自分自身を責めた事であろう。」さらに、「どんな死に様をするにしても、兄の手にかかれば、本望だ。いや、寧ろ、この頃の苦しみよりは、一思いに死んだ方が、どの位合せだかわからない。」とさえ思っている。

さて、「しあわせ」に「幸」を当てた場合、本文引用末部の文章の意味が矛盾することになる。つまり、「幸」本来の意味が、命が助かってしあわせ—だからである。仕合せ、と表記したところに芥川の感性の鋭さが表れている。

次郎の苦しみも、沙金との激しい恋と、兄への慮いと共にある。次郎の、女が持つべき貞操観と兄のそれとは、違っており「そのちがいが、余計二人の仲を、悪くする」のではないかと次郎は考えている。そうして、太郎と次郎は兄弟滅亡への激しい渦流の中へと巻き込まれていく。

—そんな事がわかったら、<sup>わたし</sup>妾は(中略)—太郎さんに殺されてしまうじゃないの」

その切れ切れな語と共に、次郎の心には、自から絶望的な勇気が、湧いて来る。(中略)彼等は二人とも、その握りあう手の中に、恐しい承諾の意を感じたのである。

ここで、主人公達と深いかかわりを持つ沙金のことについて、一応これまでのことをまとめておかなければなるまい。

#### \* 沙金について

龍之介は、主要な人物について章段を設け、物語の中心的な役割を果たすさまを描いていく手法をとっている。その中では、沙金だけ例外である。つまり、沙金が偷盗の一団の主領として登場人物の各々に強烈にかかわっていきながらも、決して章段の中心人物として描かれることはない。彼女の行方として[一]で、牛車に轢かれた蛇が運命に翻弄されたもの達の象徴として描かれていると認めるとき、沙金ほどそれに相応しい者はいないと考えられる。

出生は、お婆の思い出の中で「台盤所の婢女をしていた頃(中略)、思いがけない身分ちがいの男に、挑まれて、とうとう沙金を生んだ」と語られる。そして現在の(序章)沙金との関係は「あいつの事だわ、当てになるものか」「お前さんは、不相変疑り深いね。だから、娘に嫌われるのさ。嫉妬にも、程があるよ」とあって、太郎は沙金に惹かれながらも、奔放な男関係に疑いを持っていることを隠さない。そしてそれが苦痛であることも。

次いで、婆が自分の若い時分からの事を想い起すうち、若い次郎と出会う。次郎を前にして、太郎と沙金のことを口にする。「だが、次郎さん、お気をつけよ(中略)娘の事じゃ、随分兄さんも、夢中になり兼ねないからね」と婆に言われると、次郎は、「不快らしく目を伏せた。」と示される。ここでも、沙金由来の「不快」があること、に注意しておきたい。

太郎との関わりについて本稿ですでに述べたが、沙金の力・魅力・魔力については、触れてこなかったもので、今ここで確認しておく。

\* あの女の眼ざし一つで、身を亡ぼした男の数は、この炎天にひるがえる燕の数よりも、沢山ある。現にこう云う己でさえ、…… [三]

\* 日頃は容色を売って、傀儡同様な暮しをしている事(中略)それは、反ってあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な円光をかけるばかりで、少しも卑しいなどと云う気は起させない。

[三]

そして次郎との関わりにおいて、はじめて沙金の実像が描かれる。それは次の通り。

小柄な、手足の動かし方に猫のような敏捷さがある。中肉の、二十五六の女である。顔は、恐ろしい野生と異常な美しさとが、一つになったとでも云うのであろう、狭い額とゆたかな頬と、鮮やかな歯と淫らな唇と、鋭い眼と鷹揚な眉と、——すべて、一つになり得そうもないものが、不思議にも一つになって、しかもそこに、爪ばかりの無理もない。が、中でも見事なのは、肩にかけた髪で、これは、日の光の加減によると、黒い上につややかな青みが浮く。

[四]

沙金のこの姿は、平安期の美の規範をすべて満たしているだけではなく、龍之介の「生の把握」(醜い魂と、美しい肉身)が表出されていると観ることができる。肉体の「はたらき」による妖艶さと性質は、同一のものとして考えなければなるまい。つまり、「あの女の多情な性質」「絶えず嘘をつく」「兄や自分でさえためらうような、虐い人殺しも、平気です

る」こんな女を、「それ程、自分(次郎)は、沙金を憎んでいる。が、あの女の眼を見ると、自分はやっぱり、誘惑に陥ってしまう。」と。繰り返しになるが、恋をしながら憎んでもいるのは、太郎も次郎も同様である。これも同魂ゆえのことであろう。

ここで「偷盗」との関わりから、沙金の在り方を仏教戒律の面から見てみると不殺生、不偷盗、不邪淫、の三大罪と不妄語(うそをつくな)の戒律を犯していることになる。この沙金の行方は、最終章[九]で提示する。

### [五]

[五]は爺を中心とした「畜生」をテーマに述べられる章段であると言ってよい。ここでの畜生は、仏教に説く六道輪廻の「畜生道」のことで、親を親とも思わない・子を子とも思わない、けもの道のことである。

そこでは「意外な光景」が展開され、太郎は驚かされてしまう。つまり、

灰を頭から浴びて、ちぢれ髪の、色の悪い、肥った、十六七の下衆女が一人、これも酒肥りに肥った、禿頭の老人に、髪の毛をつかまれながら、怪しげな麻の単衣の、前も露に取り乱した儘、足をばたばた動かして、気違いのように、悲鳴を上げる――

と長々と描かれる一文は、作者・龍之介の「生の把握」の別の一面の投影として観ることができる。そしてさらに、そこには女の性のにおいがあることも、己を突き放して龍之介は物語る。つづけて、

と、老人は、左手に女の髪をつかんで、右手に口の欠けた瓶子を、空さまにさし上げながら、その中に煤けた液体を、強いて相手の口へ注ぎこもうとする。が、液体は、徒に女の顔を、眼と云わず、鼻と云わず、うす黒く横流するだけで、口へは、殆どはいらないらしい。そこで老人は、愈、気を苛って無理に女の口を、割ろうとする。女は、とられた髪も、ぬける程強く、頭を振って、一滴もそれを飲むまいとする。手と手と、足と足とが、互にもつれたり、はなれ

たりして、明い処から、急にうす暗い家の中へはいった、太郎の眼には、どちらがどちらの体とも、わからない。が、二人が誰だと云う事は、勿論一目見て、それと知れた。――

とある。女は、太郎の言葉「阿濃もかれこれ臨月だったな」[一]の、阿濃であることから、太郎は、「煤けた液体」が「薬?では、墮胎薬だな」と認定し、さらに老人を「非道なことをする老爺だ」と評定する。

この引用文に示されるのは、単なる情景ではなく「畜生」を考えるテーマの光景になっている。[八]において、阿濃が産んだ子の手を持って「この子は、わしの子」と爺が告白することを知る読者は、引用文中の爺の行為は胎児の殺人未遂であり、爺の畜生道に落ちた行為そのものである、と認定できよう<sup>5)</sup>。

阿濃に対する行為を、それと覚った太郎は、爺を殺したいとも思い、刀の柄に手をかけるわけである。その一瞬の殺意をめぐりそれぞれ沙金との関わりを含んで、太郎と爺との間で「畜生」裁定の押し問答をすることになる。

爺と太郎の「畜生をめぐって」の口論の中で、爺の身の上話となり、己の在り様を話す。

「その子を生むと、間もなく、お婆の行き方が、わからなくなって(中略)、わしは、それから俄かに、この世が味気なくなってしまうた。されば、酒も飲む、賭博も打つ。遂には、人に誘われて、まんまと強盗にさえ身を墮した」と涙声で話す爺であったが、実は酒に酔ってもいたのである。そしてさらに「婆が昔馴染じゃと云うのも、嘘なら、沙金がお婆に似ていると云うのも嘘じゃ。よいか。あれは、みんな嘘じゃ。が(中略)、わしは嘘つきじゃよ。畜生じゃよ。おぬしに殺されそくなった、人でなしじゃよ。…」と罵詈を太郎に浴びせかけてもいる。

己の在り様を「嘘じゃ」とも語る爺は、この章段では、己のすべてを話してはいない。それは、龍之介の意図でもあると考えられるが、[八]では「敵には臆病な彼も、今迄に何度、致死期の仲間の者をその鋒の先で、止めを刺したかわからない」とのべ

られている所が在るからである。つまり、自分の死を間じかに控えて人生を振り返る中で、人殺しを認めている事である。

これらを、仏教の戒律に照らし合わせてみると、三大重罪・五大罪を犯していることになり、爺には救いが無いことになる。

爺に罵詈雑言を浴びせられた太郎は、嫌悪の情に襲われて家の外に出た。そして、「朽葉色の水干とうす紫の衣とが、影を二つ重ねながら」歩く二人の男女を見て、太郎は「どうせみんな畜生だ」と呟く。[五]の締めくくりとなるこの呟きは、作品全般に及んで重い意味を持つ。

## [六]

[六]は真夜中の情景描写が主体となり、これまでの心理劇的な内容とは異なり、非常に示唆に富んだ章段となっている。

先行の研究では、内容の把握のしかたに二通りあると考えられている。まず、『偷盗』の本編は[六]から始まるという考え方。これに対し、埃っぽく一点の涼味もない救いようのない時[一]から、一縷の希望を見出し得る物語の転換点になっている、という考え方である。筆者は、後者の立場に立つ。また、龍之介の上掲の英文構想メモとの関わりに於いても、重要な章段と考えなければなるまい。[六]は次のように始まる。

更けやすい夏の夜は、早くも亥の上刻に迫ってきた。――

月はまだ上らない。見渡す限り、重苦しい暗の中に、声もなく眠っている京の町は、加茂川の水面がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光っているばかり、大路小路の辻々にも、今は漸く灯影が絶えて、内裏と云い、芒原と云い、町屋と云い、悉、静な夜空の下に、色も形も臙げな、ただ広い平面を、唯、際限もなく拡げている。それが又、右京左京の区別なく、何処も森閑と音を絶って、たまに耳にはいるのは、すじかに声を飛ばす時鳥の外に、何もない。

「見渡す限り～何もない」までは、二文で描写されていることから、龍之介の意図的な表現であると認定できよう。筆者は、かつてこの作品は、『ツアラツストラ』影響下において成立したものと考えてきた。そこでの「光・明るさ」「時間」「火」などは、救いを示唆するものとして考えられている。これに従って、この部分を考えて「水面がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光っている」の表現は、重大な意味を持つ。つまり、これ以後に登場する人物たちは、総じて何らかの「救い」を得ることになるわけである。しかし、「星の光」に着目し、ワーズワースの詩を読んで夏目金之助が詩中に記した「星落ちて空に声あり 銀河流れて夢に入る」の句に、想いをいたすとき(詳しくは拙稿参照)、全員救済という訳にはいかなくなる。

すなわち、ワーズワースの詩について「(邪悪な)肉体よ亡んでしまえ、(そうすると)『高尚純潔の靈気が(中略)人間自然両者の底に潜む』事に気づく」という金之助の記述があることを考えれば、肉体(沙金)は滅ぶことが示唆されている。(括弧内・筆者)

加えて、ホトトギスを「時鳥」と敢えて表現している。救いの時間を意識してのことと考えられる。一般的には、不如帰の表記となろう。前出の引用に続く文として次のようにある。

もしその中に一点でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなものの声が聞こえるとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の内陣で、金泥も緑青も所斑な、孔雀明王の画像を前に、常灯明の光をたのむ参籠の人々か、さもななくば、四条五条の橋の下で、短夜を芥火の影に偷む、乞食法師の群れであろう。

「火」が、前出のごとく、救いを示唆するものとなっている。さらに、ここでのもっとも大きな存在は、孔雀明王の画像である。そのモデルを仁和寺に求めたと思われるが、そこでの孔雀明王は、羽を広げた孔雀を台座にし、その上に明王が乗る姿で「明王」ながらも忿怒相をとらない。新潮文庫版の文献では、「密教で尊ぶ明王。孔雀に乗り、四本の手に

孔雀の羽を持っている。衆生を救う徳を孔雀によってあらわした仏の化身」とある。私はこれに加えて、「毒蛇を食う孔雀を神格化した明王、仏母大孔雀明王経などに説かれ、一切の諸毒を除くとされる」という項目を付加すべきものと思う。

つまり、『ツアラツストラ』に「マムシのかみ傷」の項で、まむしが、「わたしの毒は命を奪う毒なのだ」と言ったに対しツアラツストラは、「…だが、おまえの毒を取りもどせ。云々」と言い、まむしに己の毒を取り戻させた—[第一部 p108]<sup>2)</sup>。とある。「救い」と言うことでは、孔雀明王もツアラツストラも共通の要素を含んでいる。この事に注目したい。

次に注目すべきは、「羅生門のほとりには、時ならない弦打ちの音が、さながら蝙蝠の羽音のように、互に呼びつ答えつして(中略)次第に何処からか、つどって来た。」の部分である。「弦打ちの音」は、単なる合図ではなく、招魂・浄化された聖なる場を意味する(日本民俗学的に)、儀式的行為なのである。この弦打ちは、今後、兄弟愛の復活[七]から、爺の死を迎える場[八]へと続いていく、劇的な展開をもたらす示唆的な行為である。さらに、「門の前に渡した石橋へ、むらむらと集って、列を作る」とある「石橋」にも注目すべきである。聖なる場と俗なる場の境界を、仏教的には結界と言ひ、結界にかかる橋が「石橋」である。

石橋をよく小説に導入したのは漱石で、漢学の才能にも優れ中国の故事来歴にも詳しかった彼が、天台山国清寺の「邪念を持てば即谷底に落ちる石橋」を念頭に用いたものであろう。そのことに龍之介も学んだ。ここでは石橋の内側が聖なる場所で[八]の爺の最期の場を考えると、重要な意味を持つ。

この後、物語の後半部は、偷盗の団に笑み・笑いの表現が増えてきている。ここからも龍之介の意図、「救済の試み」が読み取れよう。

### [七]

[七]の前半は、次郎の必死の戦いの場を描写し、中に阿濃の白昼夢を挟んで、後半は婆の死と兄弟愛の復活を物語る。

次郎の必死の戦いの場とその背景を、次のように描かれる。

折からの月の光に、往来は、ほのかながら、打つ太刀をたがわせない程に、明るくなっている。——次郎は、その中で、人と犬とに四方を囲まれながら、必死になって、斬りむすんだ。相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる路はない。彼の心には、こう云う覚悟と共に、殆ど常軌を逸した、兇猛な勇気が、刻々に力を増して来た。相手の太刀を受け止めて、それを向うへ斬り返しながら、足もとを襲おうとする犬を、突嗟に横へ<sup>かわ</sup>躲してしまう。——彼は、この働きを殆ど同時にした。

そして「死に身になった次郎には」「恰も太刀に使われる人のように(中略)縦横に刃を交えているのである。」とも表される。

引用文中にある「同時の働き」を、その意味するところを理解し漱石・ニーチェの関わりから言えば、ショーペンハウアーの「盲目的生への意志による行動」と理解することができる。因みに、ニーチェは「人間には盲目的に権力への意思がある」と言うけれども、漱石と龍之介は「生への意思」説を採っているので、妄信的にニーチェの考えに従っていないことが理解できる。(以下、参考文献1に、13頁4行目まで従う)

そして、次郎はこれらの行為を繰り返しながらも、次第に追いつめられ野犬が人肉を奪い合っている中、究極の場へと追い込まれていく。

「どうせ死ぬのなら一思いに死んだ方がいい」彼は、そう心に叫んで、潔く眼をつぶったが、喉を噛もうとする犬の息が、暖かく顔へかかると、思わず又、眼を開いて、横なぐりに太刀をふるった。何度それを繰返したか、わからない。しかし、その中に、腕の力が、次第に衰えて来たのであろう、打つ太刀が、一太刀毎に重くなった。今では踏む足さえ危うくなった。云々。

次郎は、絶望の目をあげて、天上の小さな月を一瞥しながら、太刀を両手にかまえた儘、兄

の事や沙金の事を、一度に石火の如く、思い浮べた。兄を殺そうとした自分が、反って犬に食われて死ぬ。これより至極な天罰はない。——そう思うと、彼の眼には、自ら涙が浮かんだ。

が、犬はその間も、用捨はしない。云々。

引用の、次郎以下の文章は、[七] 末尾にある「兄弟愛の復活」の伏線になっていると考えなければなるまい。つまり、真理を表す月を観ながら自分の行為を、一瞬のうちに懺悔した。この懺悔は、よい「生」に生まれ変わるための手続き・儀式と考えられなければならない。また、ニーチェによれば、「精神とは、みずからの生のなかに切り入る生である」こともあって、はじめて兄弟愛に目覚め、救われていくのである。

龍之介はまた、「盲目的生への意思」に対する、「生」の限りを尽くして死へ抵抗する命をも描写する。昼間、沙金と一緒に歩いていた樺桜の男に対する次郎の行為である。つまり

両手に緊く握った太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。そうして、一たまりもなく仆れる相手の男の顔を、したたか藁沓でふみにじた。

彼(次郎)は、相手の血が、生暖く彼の手にかかったのを感じた。太刀の先が肋の骨に触れて、強い抵抗を受けたのを感じた。そうして又、断末魔の相手が、ふみつけた彼の藁沓に、下から何度も噛みついたのを感じた。

というのが、それである。生の対比によって、一方の生が際立って表現されている。まさに運命の分け目を決する、生存をかけての必死の戦いである。

#### \* 阿濃

阿濃も沙金と同様に、作品中に独立した章段を持っていない。[七]の必死の戦いの場の中に、対照的に阿濃の挿話が描かれる。

その姿は「その間も阿濃だけは、安らかな微笑を浮かべながら、羅生門の楼上に佇んで、遠くの月の出を眺めている」と、悪に染んでない者の姿として象徴的に示される。また、その性格的な描写は「白痴に近い天性を持って生まれた彼女にも、苦しみを、

苦しみとして感じる心はある。」・「どうにかこうにか、覚えているのは、物心がついてから後の事ばかりである。そうして(中略)、覚えていない方がよかったと思うような事ばかりである。」と示される。阿濃に対する、覚えていないほうがよかったと思うのは、猪熊の婆、爺、沙金も同様な態度である。さらに

まして、外の盗人たちは、打つにも叩くにも、用捨はない。阿濃は、その度に何時もこの羅生門の上へ逃げて来ては、独りでしくしく泣いていた。もし次郎が来なかったら、そうして、時々、やさしい語をかけてくれなかったら、恐らくとうにこの門の下へ身を投げて、死んでしまっていた事であろう。

と描かれる。そして「腹の児が、身動きする」のを彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくように、腹の児は又、人間の苦しみを嘗めに来ようとして、もがいている。

と示す。ここに龍之介の「人間の苦しみ」という人間観が投影されているように思う。しかし「阿濃は、そんな事は考えない。唯、母になると云う喜びだけが(中略)彼女の心を一ぱいにしているからである。」と阿濃の白痴ぶりを描く。また、「人間の苦しみ」の最中にある彼女にも夢があった。それは盗人たちは、(中略)腹の児の親さえ知らない、阿呆な彼女を嘲笑った。が、阿濃は胎児が次郎の児だと云う事を、緊く心の中で信じている。そうして、自分の恋している次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然な事だと信じている。この楼の上で、独りさびしく寝る毎に、必夢に見るあの次郎が、親でなかったとしたならば、誰がこの児の親であろう。

というものであった。この夢(人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、傷しい夢である)によって、阿濃は「人間の苦しみ」を忘れた。そしてそこでは、一切の悪が、眼底を払って、消えてしまう。そして、母になる喜びのうちに、阿濃は出産を迎える。

その一方、偷盗の一团は必死の戦いを続けてい

る。瀕死の重傷を負った猪熊の爺を、婆が命を賭して助けるのである。しかし婆は、その最期を迎える。

「お爺さん、お爺さん」と、かすかに、しかもなつかしように、自分の夫を呼びかけた。が、誰もこれに答えるものはない。(中略)——猪熊の婆は、次第に細って行く声で、何度となく、夫の名を呼んだ。そうして、その度に、答えられないさびしさを、負っている創の痛みよりも、より鋭く味わされた。しかも、刻々衰えていく視力には、次第に周囲の光景が、ぼんやりと霞んで来る。唯、自分の上にひろがっている大きな夜の空と、その中にかかっている小さな白い月と、それより外のものは、何一つはつきりとわからない。

「お爺さん」

老婆は、血の交った唾を、口の中にためながら、囁くようにこう云うと、それなり恍惚とした、失神の底に、——恐らくは、さめる時のない眠りの底に、昏々として沈んで行った。……猪熊の婆は、自分の命を爺への無償の愛として与え、大きな夜の空に浮かぶ小さな真如の月に照らされながら、それなり恍惚とした失神の底へと眠りについた。

ここには、それなりの充実した「生」の終わりが描かれており、婆にはそれなりの「救い」が有ったと認められなければなるまい。

救いの一つの形として、兄弟愛の再度の目覚めがある。

太郎と次郎が兄弟愛に再度目覚める過程の心情描写は、力ある心理劇の面を見せている。すなわち、太郎は「昂然として、馬を駆って」いた。そして、「辻を曲がった彼は、行く手の月の中に(中略)群がる犬の数を尽くして」集まっている中に、唯一人太刀をかざしている人、すなわち次郎の姿を見た。

「次郎か」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、険しく眉を顰めて、弟を見た。(中略)

すると忽ち又、なつかしい語が、溢れてきた。

「弟」である。肉身の、忘れる事の出来ない

「弟」である。太郎は、緊く手綱を握った儘、血相を変えて歯噛みをした。この語の前には、一切の分別が眼底を払って、消えてしまう。弟か沙金かの、選択を強いられた訳ではない。直下にこの語が電光の如く彼の心を打ったのである。彼は空も見なかった。路も見なかった。月は猶更眼にはいらなかった。唯見たのは、限らない夜である。夜に似た愛憎の深みである。(中略)

(太郎の)怪しく熱している隻眼に、次郎は、殆ど憎悪に近い愛が、——今まで知らなかった、不思議な愛が燃え立っているのを見たのである。(中略)——馬の頭が、鬣に月の光を払って、三度向きを変えた時、次郎は既に馬背にあって、ひしと兄の胸を抱いていた。

言うまでもなく、月の光を浴びた一頭の馬に、同魂の男達、太郎と次郎が抱き合っ一緒に乗っていることに、重大な意味がある。すなわち、同魂の太郎と次郎の二つの魂が一つになり、その姿が人間の真理を顕すように、真如の月光を浴びて輝いている、ということである。太郎と次郎の締め括りは、「天の河」となる。それは次の通り。

二人は静に馬を進めて行った。兄も黙っていれば、弟も口をきかない。しんとした夜は、唯馬蹄の響きに銜をかえして、二人の上の空には涼しい天の河がかかっている。

「涼しい天の河」は、「安堵・安息・充足」の象徴としてあり、太郎と次郎が兄弟愛に目覚めるのが当然の帰結である、と理解できる。「天の川」の淵源をたどれば、漱石『坊ちゃん』八の末尾には同様に「空には涼しい天の川がかかっている」と記す。漱石由来の文学手法を用いていると考えられる。

## 〔八〕

「八」は阿濃の出産と爺の最期を描く章段である。龍之介のメッセージを色濃く示すものとして、車輪にひかれた蛇、すなわち、運命に翻弄された者たちの行方、がある。最初に、その帰結部から示す。

一同は、「死」が遂に、この老人を捕えたのを

知った。しかし彼の微笑の意味は誰も知っているものがない。

猪熊の爺は、寝た儘、徐に手をのべて、そっと赤ん坊の指に触れた。(中略)唯、彼の顔には、秘密な喜びが、折から吹き出した明け近い風のように、静に、心地よく、溢れて来る。彼は、この時、暗い夜の向うに、——人間の眼のとどかない、遠くの空に、さびしく、冷かに明けていく、不滅な、黎明を見たのである。

「この子は、——この子は、わしの子じゃ」

彼は、はっきりこう云って、それから、もう一度赤ん坊の指に触れると、その手が力なく、落ちそうになる。——(中略)猪熊の爺は、暗に悸えて啼く赤子の声の中に、かすかな苦悶をつづけながら、消えかかる松明の火のように、静に息をひきとったのである

爺は、赤ん坊の指に触れながら、夜の向こうに不滅な黎明を見、かすかな苦悶の中に息を引き取った。彼の表情には「かすかな苦悶」は有るものの「秘密な喜びがあふれ」ていたという。いわば、このようなかたちで不完全ながらの「救い」を得たものと考えられる。

しかし猪熊の爺は、仏教的には畜生道に落ち、三大罪・五大重罪を犯し「あれは、みんな嘘じゃ。(中略)わしは嘘つきじゃよ。畜生じゃよ。おぬしに殺されそくなつた、人でなしじゃよ。…」[五]とその反省すらない。したがって、救われる要素は一つもない。唯一救いがあるとすれば、阿濃の生んだ赤ん坊の愛の力であろうか。さりとして「赤ん坊の愛の力」というには疑問が残る。

ここで、猪熊の爺がおかれている「場」[六]を思い起こしてみると、そこには救いを示唆する重要なものがあった。すなわちそこは、弓の弦を打ち鳴らすことによって得られた・浄化された場所に、苦悩する衆生を救うという聖なる孔雀明王が、燈明の火明りに照らされているところである。ここで爺は、自分の生涯を省みる。

眼の前には、さまざまな幻が、瀕死の彼を嘲るように、ひっきりなく徂徠すると、その幻と、

現在門の下で起っている出来事とが、彼にとっては、何時か全く同一な世界になってしまう。彼は、時と処とを別たない、昏迷の底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越した或順序で、まざまざと再、生活した。

ここでは懺悔を意味する言葉は、用いられていない。しかしこの後、猪熊の爺は現実を理解し過去の己の所業を悔やむことになる。すなわち

今迄に何度、致死期の仲間の者をその鋒の先で、止めを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すと云う、唯それだけの興味から、或は自分の勇気を人にも自分にも示そうとする、唯それだけの目的から、進んでこの無残な所業を敢てした。それが今は——

と、爺は周囲の現実を理解しながら、自分の死と「来し方」とに向き合って、悔恨の情にかられると理解できる。言わば、不完全な懺悔を行った。その結果、凌霄花の香りの中「かすかな苦悶をつづけながら」爺は死を迎えることが出来たのである。「どうやら、前よりも真人間らしい顔になった」というのが、偷盗の一員の評価である。

## 〔九〕

「九」は沙金の最期、とその後の、阿濃や盗賊たちについて語られる章段である。

小説では、後日談風に、翌日、年が若く肥った、うつくしい女が虐たらしく殺されていたのが発見された、と描かれる。そしてまた、「不思議な事には、その家の婢女をしていた阿濃と云う女は、同じ所にいながら、薄手一つ負わなかった。」とも。

その阿濃の口を借りて、沙金の最期の有様が語られる。それは「その夜」の出来事であった。

次郎が、いきなり太刀をぬいて、沙金を斬った。沙金は助けを呼びながら、逃げようとする。今度は太郎が、刃を加えたらしい。それからしばらくは、唯、二人の罵る声と、沙金の苦しむ声とがつづいたが、やがて女の息がとまると、兄弟は、急に抱きあって、長い間黙って、泣いていた。

沙金は苦悶のうちに、その生涯を閉じた。仏教戒律の三大罪と、不妄語(五大重罪の一)の戒律を犯し、すでに[四]で示した通り、懺悔もしないで「殊更月の光にそむきいて」[七]という沙金には「救い」がなかった。肉体美と力強い肉体の働きを持つ沙金は、魂の力を一つにまとめた太郎と次郎の刃によって、苦悶のうちに息の根が止められたのである。

ふり返って、肉体に対して龍之介は、否定的な見方をしていたのではないかと思う。具体例を示すと「生まれたばかりの赤ん坊が、人間と云うよりは、寧ろ皮を剥いた蛙のように、大きな頭を重そうに動かしながら、醜い顔をしかめて、泣き立てている」・「魚の腸をぶちまけたようなものが、うす暗い中で、啼いているわ。(中略)月明かりにかざして見ると、この通り生まれたばかりの赤子じゃ」(八・阿濃の出産の場)などは、上記のように思わせる。

また、その淵源をたどれば、漱石にまで遡ることができるのではないか。つまり、金之助購入のワーズワース詩集中に、The Complaint of a Forsaken Indian woman という詩(p, 51~p, 53)がある。中の一文、Oh let my body die away が見え、最後の一文にも全く同一のものが記されて終わる。「(邪悪な)肉体よ減んでしまえ、(そうすれば高尚純潔の霊気が)…(括弧内・筆者)」。そして、この英詩の右側空白部に、「星落ちて空に声あり 銀河流れて夢に入る」の句が書き記されていることから、金之助はこの詩に大変な共感を覚えたものと考えられる。

龍之介も同様な考えを持っていたのかもしれない。彼は、ぼんやりとした不安から、眠れず、睡眠薬を多量に飲み自殺してしまうことになるのだが。睡眠薬は、統合失調症の症状緩和のため処方されていたという。

ふりかえって、導入部の車輪にひかれた蛇で示された、運命に翻弄された者達・特に女達は、阿濃以外、全員滅亡することになる。その代表は、疫病に罹って捨てられた女である。彼女はもと高貴な身分であったが、疫病に罹り捨てられ、「真夜中に」野犬に食いちぎられて命を落とした。猪熊の婆は不実な夫を、命を無償の愛に代えて救い、それなりに満

たされながら永久の眠りに就いた。沙金は、すぐれた肉体美と強力な肉体のはたらきにより、男達を魅惑し三大罪を犯して懺悔もない者であったが、二つを一つにした魂の男達、太郎と次郎によって虐殺された。一方、女性の純粋な本能的「愛」をもって「生」の再生育成をおこなった阿濃は生き残った。

その阿濃には「罪の無いのが明かになり、自由の身にされた。十年余り後、尼になって、子供を養育していた」事が、明らかにされる。また男達は、世に名の通った武士になったとも。

『偷盗』に込められた龍之介のメッセージは、「肉体は滅びるが、精神は残る」だろう、と考えられる。そして『偷盗』という題名は、阿濃が出家して尼になった事と、響き合って締めくくられている。

## おわりに

『偷盗』の構想メモとされるのは、手帳<sup>7)</sup>。に英文で「真夜中に暗がりの中で何かが起きる」と書かれていることによる。それは、示唆的に情景描写として[六]に描かれている。また、作者の自己評価<sup>8)</sup>。(大正六年、三月、四月 松岡譲宛書簡)として次のようなものがある。

1) トンマナ嘘がある。

阿濃へ墮胎薬を飲ませる事だと考えられるが、私は、爺の破戒ぶりを示すためのやむを得ない描写であると考えている。

2) 登場人物の性格付けが甘い。

私は、サブテーマとして示した、運命に翻弄された者達の行方と「救い」—を具体性を持って示す、心理小説的な側面があることによる、と考えている。

3) 安物の絵草紙(メロドラマ)風な作品

4) 悪作

完璧主義者の龍之介にしてみれば、これらの自評は主テーマから外れたところにあるものの、許すことができなかつたものと考えられる。「ツアラツストラ」を作品の下枠にする中、仏教の戒律的な要素や東西の哲学的要素などを導入し、作品を作り上げて行ったことを考えると、『偷盗』は決して悪作では

ない。むしろ大作であると思うが、龍之介の意図を十分には理解できない人の方が多かったのかもしれない。

謎といわれる部分を、読み解いてみると、何となく拍子抜けの感が無くはない。しかし、読み物としての『偷盗』には感動すら覚えた。それに値する作品であると思う。

### 参考文献

- 1) 「『ツアラツストラ』影響下における漱石・龍之介の創作活動の検討」—ワーズワース詩集及び『坊ちゃん』『偷盗』の「天のがわ」を見据えて— 順天堂大学「ス

ポーツ健康科学研究」第9号, 05.

- 2) ニーチェ『ツアラツストラ』手塚富雄訳 第1部「マムシの噛み傷」p106 中公文庫
- 3) 文献表1, と同. P33~p40参照.
- 4) ニーチェ『ツアラツストラ』手塚富雄訳 第3部「後の舞踏の歌」p362~p369 中公文庫
- 5) 越智治雄「偷盗・作品論」(『国文学』昭47, 12臨増).
- 6) テキストは新潮文庫『地獄変・偷盗』.
- 7) 芥川龍之介全集 第十三巻所収「手帳 一」岩波書店
- 8) 芥川龍之介全集 第十巻所収「書簡」岩波書店

(平成23年8月3日 受付)  
(平成23年10月3日 受理)